

## 生態系ネットワーク保全とビジネスを融合した公園モデル構築

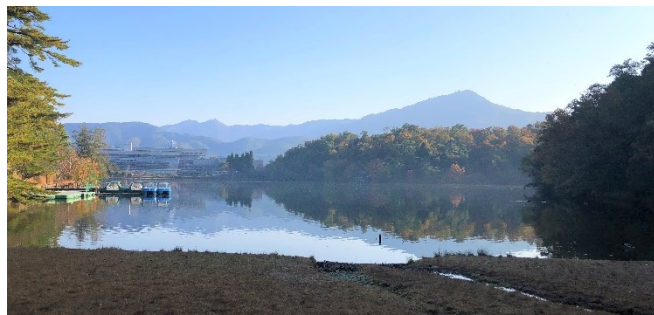
インフラの維持管理・修繕等に係る官民連携事業の導入検討  
官民連携グリーンチャレンジモデル

## ①解決したい課題

宝が池公園は、京都三山の一つである北山の最南端に位置し、約128haの広大な園内には、京都の景観の構成要素となっているアカマツ林などの貴重な森が広がっている。尾根と谷が入り組み、小規模な集水域が組み合わさることで、多様な植生が見られ、多様な生きものの生息環境にもなっている。西側には国指定天然記念物に指定されている深泥池が位置し、園内南側には京都五山送り火の一翼を担う「法」の字の火床も有している。

しかし、この公園は、昭和40年頃からの松枯れに始まり、ナラ枯れ、鹿の食害、外来種の増加などにより、生物の多様性が急速に失われており、景観や歴史文化、防災上の課題が生じている。広大な森があるにもかかわらず、利用者が安全・安心な遊び・体験・活動を行うことが難しくなっており、情報共有・発信の仕組みの不足もあり、身近な森への関心や理解が広がっていない。

公園の管理運営上の課題としては、老朽化や広域公園としての機能の不足、限定的なマンパワー等が挙げられ、財政状況も踏まえると、行政だけでは自然共生型の公園の管理運営を実現することは困難な状況である。



## ②課題解決の方向性のイメージ

宝が池公園は、「その他」で示す通り、非常に多彩なポテンシャルも有していることから、これらを最大限に生かし、ビジネスと結びつけつつ、また有数の国際都市でもある京都の発信力をもってその価値を高めながら、官民連携による宝が池公園ならではの自然共生型管理運営モデルを確立したいと考えている。特に、地球規模の環境問題のうち、脱炭素化だけでなく今後ビジネスとの結びつきの強化が期待される生態系ネットワークの保全も重視したい。

自立・自走型の管理運営モデルとするため、管理上のバックヤードとして運用しているエリアなど広大な園内敷地や公園資源を有効活用して、既存利用者や自然に配慮する形で、ハード・ソフト両面からの公園利活用ビジネスモデルの研究・実装を進めたい。

ハード面としては、①自然資源を活用した発電施設②デジタル技術、データの活用による森の保全・再生・活用の取組、健全な水循環システムなど「生態系ネットワークの保全」「脱炭素化」の課題に対応する共創拠点などの複合機能を想定している。

ソフト面としては、①環境問題について学び・実践する教育プログラム②森を活用したプリミティブな遊びのプログラム③園内で資源を循環させながら提供するサービスなどを想定している。

これらにより、類似公園等への展開も可能な汎用性も考慮した、生態系ネットワークの保全に資する自立・自走型管理運営モデルを確立する。

## ③その他

以下のとおり、宝が池公園は、グローバルな人材の知恵の結集を図ることのできる、ポテンシャルを秘めたパブリックスペースである。

- 地下鉄の利用により、京都駅から20分で到達できるアクセスの良さ
- 森～水辺まで、多様な生きものを育む環境を有しているため、様々な実践的研究ができる自然環境
- 令和7年度の5,000人収容のニューホール増築を通じて、多様なグローバル人材の更なる来訪が期待される京都国際会館（「京都議定書」誕生の地）が隣接
- 松ヶ崎妙法送り火及び日本最古の盆踊りといわれている松ヶ崎題目踊り等の伝統文化を保存継承するエリアが隣接
- ノーベル賞受賞者を2人輩出するなど先駆的な気風の下、地域主体で公園の利活用にも取り組む等、人口増加が続く活力あふれるエリアが隣接
- 京都府立大学、京都工芸繊維大学、京都ノートルダム女子大学、京都産業大学、京都精華大学などの教育機関が集積。また、京都大学、立命館大学、京都先端科学大学などが、フィールドワークを通じて継続的に関与
- 「公民連携 公園利活用トライアル事業」を通じた多彩な社会実験を出発点に、地域住民、企業、大学、市民活動団体、クリエイター、行政など多様な主体による共創のコミュニティを形成。令和5年度からは、エリアプラットフォームが始動



都心部からすぐに行ける森

130人以上が参加する  
共創のコミュニティ

実践的活動